

# 水井戸の話

## 泉

村下敏夫

去る11月6日 日本地下水学会の秋季研究発表会が仙台で開催された翌日 学会長奥津春生氏の案内で青葉山の泉を見学した。うっそうと茂った木立に囲まれた沢頭にある泉は その昔海拔120mに近い仙台城の本丸で「御清水(おおず)」と呼ばれ利用されていた水源であったという。この泉は 青葉山の頂上部にのっている厚さ20m内外のれき層に浸透した雨水が湧き出したもので 落葉の香り高いあたり一面に 鈴のような音をたてて流れていた。またお城の中でもっとも重要な場所である二の丸には七つの手掘り井戸があって 常時1600人の大番士の用水にあてられていたという(図1)。

人の生活に欠かせない水を われわれ祖先はどのようにして得ていたのであろうか。井戸技術が発達していない大昔では 自然に湧き出る泉を井(いど)または走井(はしい)と呼んでいたようである。広辞苑(新村出編 岩波書店)によると 井は泉または流水を汲み取る所 走井は谷川などの流れが清く飲料水を汲むべき所 流井(ながれい)は水の湧き出て流れる井戸 となっている。上古の人たちは 洪水を避けて小高いところに住居をかまえ こんこんと湧き出る泉のほりに集落を形成していたのではなからうか。年中変ることなく清らかな水が流るように湧く泉は あるいは信仰のままと

なって 水神様として崇敬されてきたのであろう。われわれが水調査をするときには お宮 お寺にまず足を止めてみる。そこには 泉や由緒ある井戸があるからである。現在用いられている井戸(戸は添辞)は 用水を得るために地を掘って地下水を汲み上げ または汲みとるようにしたもの(新村出・前出)をさしている。井の語源は 泉であって 人工的に地下に穴を掘る技術が開発されてから 井戸の意味が変ってきたのではなからうか。

泉は 地方では「清水(しょうず)」といわれ「がま」と呼ばれて親しまれている。私の住んでいる昭島市にも いくつかの泉があって 集落形成の素因の一つになっていたように考えられる。東京の西に広がる武蔵野台地は 水が得にくいところで その昔旅人たちは「武蔵野の逃水」に迷わされて 旅行に苦勞したものであろうが ここに古くからある集落は 水の得やすい崖ぶちの所 山際の所に分布している。昭島市の中でも武蔵野の面影を残している福島 宮沢 大神 拜島などの集落は 泉や簡単な手掘りで地下水が得られる所である。市役所から少し南に下った諏訪神社の境内にある泉(写真1)は 古くから知られている名水で 宮沢の地名の起源といわれている。拜島には大昔から使用され どんな早ばつの時でも枯れたことがなかったと伝えられる「花井の井戸」がある。この井戸は 拜島三つの井戸の一つで 花井は拜島の上古の呼名である。正月2日3日の「だるま市」で近郷に著名な拜島の元三大師は 泉に囲まれた静かな環境の所にある。大師の境内にある「おねいの井戸」も拜島三つの井戸の一つで または「お鉢の井戸」とも呼ばれている。室町時代の末頃 滝山城主 北条氏照の重臣石川土佐守が大日堂に娘おねいの眼病平癒を祈願し この井戸の水で目を洗って治ったと伝えられている。これらの井戸は 今では水も汚れて昔をしのぶ面影もないが かつては美しい泉で 人々



図-1 仙台城の井戸 (奥津春生氏による)

1 宮沢の泉



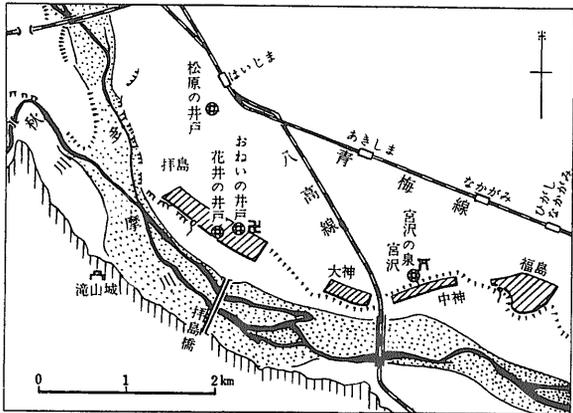


図-2 昭島市宮沢の泉

に親しまれ あがめられてきたのであろう(図2)。

今に伝えられる名井 名泉のほかにも 奥多摩街道沿いの崖ぶちからは 清らかな水がいたるところに湧き出て「かけひ」で家の台所まで引かれている。川水を水源とした カルキ臭い 夏には生温く 冬には冷たい 都市水道水に頼っている人たちからみれば これはまことにうらやましい光景である。多摩川の支川 秋川沿いにある野辺 久保 代継 引田などの集落でも きまって美しい泉を見出すことができる。

人間生活と深い関係をもちつづけてきた泉は 専門的にいえば 地下水面と地表面との接触部にできたものである。地下水面は季節によって変動することがあるから 泉には常時湧出するもの ある季節だけにかぎって湧出するもの 降水があるときだけ湧出するもの あるいは一日の中のある時間に 間歇的に湧出するもの などがある。

昔の人が 走井 流井と呼んでいたように泉の湧出状態は 勢いがあるものほど偉大である。富士の西山麓にある白糸滝(写真2)のように熔岩の裂け目からほとばしり出て ときには瀑布をかけるものは 雄大である。泉を湧出状態によって分類すると 白糸滝のようなものを**迸出泉**と呼んでいる。盆状にくぼんだ底から水が湧出し その中に水をたたえたような状態のもの — 今ではすっかり形を変えた武蔵野の「井の頭池」「善福寺池」「三宝寺池」のようなものは **池状泉**という。沼沢状をなして アシのような挺水植物が繁茂している状態の泉は **湿地泉**と呼ばれている。

泉は 地下水面と地表面との接触部にできるから 帯

水層の下盤の形には無関係で むしろ地形に影響される。徳島県吉野川の右岸にある鴨島町の江川湧泉は 夏に低温 冬に高温の異常水温現象を呈する池状泉として有名である。これは 泉を地形の面から分類すると 旧吉野川に沿った**沿河泉**である。山麓の地下水面が谷川のそばで露出する**谷壁泉** 段丘から湧出する **崖下泉**はよく見うけるものである。さきほど紹介した昭島市の宮沢 おおい 花井の井戸は 崖下泉である。平安末期の悲運の武将木曾義仲にまつわる 洗馬の清水(長野県) 弓の清水(富山県)なども崖下泉に属する。

地下水面が地表面のごく小さいくぼ地と接触してできる池沼状の**凹地泉**は 関東ローム台地によくある。沖積扇状地の末端に分布する泉は **扇端泉**と呼ばれて 扇状地の勾配が急→緩と大きく変るところにある。この泉は 北陸 東海 四国の瀬戸内海側に発達する扇状地では よく見られる。また扇端泉は 扇状地の地下水調査には重要な水露頭であって 扇状泉から下流では深井戸を掘ると よく自噴する。

沿河泉 谷壁泉 崖下泉 凹地泉 扇端泉は 帯水層が砂れきでできている場合の接触泉(重力泉)であって別に**地層泉**とも呼ばれる。同じ接触泉でも 石灰岩などの洞くつから湧出する泉 熔岩などの多孔質岩石の裂け目から湧出する泉などは **岩裂泉**ともいわれ 湧出量の点では地層泉に比較してはるかに多い。広島帝釈峡 高知の竜河洞など 石灰地帯の泉は別に **洞くつ泉**と呼ばれる。火山山麓の泉はその規模も大きく 中でも富士山麓では 清水村の泉川 富士宮市の浅間神社の泉 上井出町の白糸滝 阿蘇山麓では熊本市の建軍の泉などは すばらしく雄大なものである。

(筆者は 応用地質部)

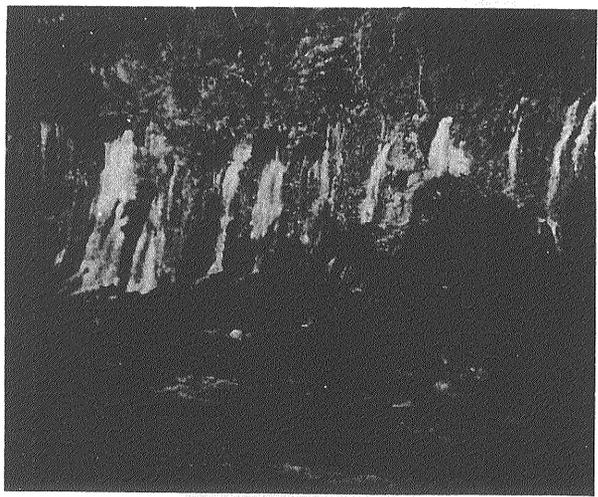


写真-2 白 糸 滝